

なほ洗雪する所もあらずして、まことになげかは  
 しきさはみなり、われは不敏の身なれども、潛に  
 京都に上りて、縉紳の門に出入して志の在る所を  
 告げ、君公の冤を雪がんとおもふ、事もし成らず  
 ば、一死を以て國家に報いん覺悟なり、願くはこ  
 の事を許させたまへと。母もその決心の頗る堅き  
 を見、その忠節に感じてたやすく、承諾せしのみ  
 ならず却て之をすゝめはげましたり。(つづく)

おもひきり

山田の案山子竹の弓

なすこさもなく

くちばてんきは

中山忠光

紅葉狩

文苑



時雨ふるあしたを待ちて思ふどち

水野忠敬

野山の奥のみみぢがりせん

相澤 朮

揚ばりの中のまとのゑはあてびとの

今日この山に紅葉みるらん

赤堀信成

きさはよしのみかくるとも二荒山

夕日の照す紅葉みてゆかん

矢田猪平

渡舟もみちかざしてうちのれは

にしきたいよふ水のみも哉

山崎房吉

山深くとめ行くわれをひかふらし

ふもとのさとの紅葉ひと本

石搏千亦

うすひ山二荒のやまのもみぢ葉は

くるまの窓にあふれける哉

横山 碩

おのがしゝ折りてもて來し紅葉の

色くらべみる瀟車のうち哉

都築高藏

たらちねの母に見せばや尋ねえし

もみぢの一枝家づとにして

増山三雪子

冬の日はみじかけれども山ふかく

もみぢがりして遊び暮さん

松平岳子

尋ね得しもみぢの蔭につとひつゝ

月出るまであそびつるかな

奥村岸子

峰も尾ももみぢにつゝひ妙義山

にしきのとばり張かとぞみる

三十

頭本春子

うつくしと幼き人のゆびざすは

ことに色よき紅葉なりけり

佐藤朝恵子

色深き峰のもみぢをこゝろあてに

のぼりし岩ね下りわづろふ

大竹いせ子

ゆけとく道のつかれもふもほえず

たゞ紅葉にこゝろそめつゝ

關居愛子

三人四人心あへる友と山にゆきて

今日も日暮し紅葉がりしつ

渡邊須磨子

花よりも散るには脆さもみぢばを

拾ひあつめて家つとにせん

加藤ひな子

今日往きて紅葉をみばや明日は又

誘ふ嵐にちりもこそすれ

關井ぬひ子

ひさごには酒未だつきす紅葉には

夕日てりそふをいそぎ歸らん

小幡八重子

かけり行く夕日とやめて山ふかみ

しぐれぬ先の紅葉とはイヤ

佐々木雪子

嫁きては三とせもあはぬ友のいへ

紅葉みがてら今日は訪はまし

印東昌綱

年毎のもみぢのころにおとづれて

したしくなりぬ山守がをぢ

佐々木信綱

男の子わまた道のち茅を拂ひけり

明日山ぬしのもみぢ狩として

蝦夷のみちしば

鷺

水

月の小樽みなと

君戀ふる袖に涙のはらはれて

こゝろとくもる波の上の月

「エルム」となんいへる

都には見ぬいと大きやか

なる木ありけり

降る雨をしばしよけんとわれも人も

エルムのかけにたちつとひけり

旭川をたち出で夕張

となんいへる里に宿り

ける夜よめる

旭川今朝越え來れば旅衣

ひも夕張の里につさけり

室蘭より舟にて函館に

わたる

室蘭を昨夜棹さして玉くしけ

曙いそく函館の海

津輕の海をわたる